

事例 8 : ベッド柵

対象者の状況

- ⇒ 84歳、女性 要介護度4、寝たきり度B1、認知症高齢者の日常生活自立度 b
- ⇒ 夜間、ベッドから降り、はつての徘徊が頻繁に見られ一時は全く目が離せない状態であった。

身体拘束の状況

過去にベッドから降りた時、左手首を捻挫したことがあり、夜間の徘徊によりベッドから転落する危険があるため、ベッド誘導時は、柵4本を固定していた。

対応方法の検討

アセスメントを行うことにより、なぜ夜間に徘徊があるのかを究明することとした。

対 応

本人が話をされる内容から、家のことを気にしておられることが感じられ、夜になると孫のことが気にかかり落ち着きがなくなることがわかった。そのため、家族へも本人の状況や心情を伝えるようにしていた。

夜間の良眠を得るため、日中の創作活動への参加、運動のためのリハビリにも参加してもらった。

経 過

本人の思いをくんで、御家族も面会に来られるなど協力をしていただけた。

日中の活動のおかげで、夜間はベッドから降りることもなく、訪床時も朝まで良眠しているため、ベッド柵を外すことができた。

【着眼点(ポイント)】

本人の話に耳を傾け、徘徊等の原因を究明した上で対応ができています。

昼間、活動的に過ごしていることが夜間の良眠につながっている事例である。